

NPO法人リベルテの メンバーのための上映

2023年2月25日、26日の2日間、長野のNPO法人リベルテで、メンバーのための上映会が行われました。初年度の「劇場をつくるラボ2021」で、たんぼぼの家、ぬかつくるとこ、愛成会、やまなみ工房、はじまりの美術館で開催された、様々な方法で映画鑑賞を行う実験的鑑賞企画です。市街に3箇所あるアトリエに機材を設置し、建物の空間に合わせた上映環境を作りました。2021年のプロジェクトメンバーが事前にオンラインで作品紹介をしたほか、建物ごとに上映作品を変え、リラックスできるしつらえの中、THEATRE for ALLで配信している三好大輔/川内有緒 ドキュメンタリー映画『白い鳥』などとともに『PAPER?/かみ?』も上映されました。リベルテには、メンバーの感想が貼り出されました。



写真提供=NPO法人リベルテ

報告会

「劇場をつくるラボ」とはなにか?

2022年度の取り組みをふりかえって



長津結一郎

(九州大学大学院芸術工学研究院准教授
同研究院附属社会包摂デザイン・イニシアティブソーシャルアートラボ長)



佐藤拓道

(社会福祉法人わたぼうしの会
たんぼぼの家 アートセンターHANA 副施設長)



梅原 徹

(音楽家・美術家/劇場をつくるラボ2021・2022 プロジェクトメンバー)



金森 香

(一般社団法人 ドリフターズ・インターナショナル/
THEATRE for ALL 事務局)

金森香(以下、金森) 今日(2022年度)の「劇場をつくるラボ」から関わっていただいている3人にご参加いただきました。初年度は、福祉施設の場にどのような機材や時間の流れや環境を作るとそこに劇場が出現させられるかということに取り組んでいました。その中でTHEATRE for ALLで配信している映画や長編映像を持っていくだけでは楽しみづらいのではないかと課題があり、今年度はどういった映像や体験だったら成立するんだろうかと短編のオリジナルアニメーションを作り、それを上映するワークショップを実施しました。2021年の劇場をつくるラボから関わっていただいた梅原さん、まずは、今年を振り返っていかがですか?

梅原徹(以下、梅原) 1年目はコロナで遠隔だったこともあって、プランに対してどんな反応で返ってくるのかを観察するような感じでした。今年は自分も施設に赴いてワークショップをやったんですけど、正直なところもう少し映像の作り込みをした方が良かったんじゃないかなと思っています。例えば尺は10分で良いのか。何分の映像が何個あった方が良いのかなど、アイデア出しから出来るとよかったです。



金森香さん

金森 映像が完成して、上映会を実施いただいた時に、シンプルだけどものすごくエポックメイキングだったのが、たんぼぼの家の佐藤さんのアプローチでした。音楽家の蓮沼執太さんが作った映像作品の“音楽を抜いて”鑑賞するというのを、冒頭に取り入れてくださったことで音を考える時間が生まれました。

佐藤拓道(以下、佐藤) 紙を破っている時に破っている音が出ているわけではないというこの作品を観た時に、自分自身が破る音を作りたいなと思っただけなんです(笑)。音を入れたいくなる感覚っていうのが、もしかしたらあるのかなって。障害のある人たちって、比較的完成されているものを渡されることが多い。不完全なものから作り上げる機会があると、参加している感覚になることができます。

梅原 金言ですね。今、すごく反省しました。芸術や福祉がどうではなくて、完成されたものを渡されているなって。

アウトリーチとしての「劇場をつくるラボ」

長津結一郎(以下、長津) 梅原さんがグッときたポイントは僕も気になりました。昨年は福祉施設っていう劇場じゃない場所に、

劇場を移設しカスタマイズするというようなすごくシンプルなことをやっていました。今年の活動を既存のフォーマットで言うと「アウトリーチ」(学校や福祉施設にアーティストの活動を届けること)なんです。ではいわゆるアウトリーチと何が顕著に違うのかというと、一つ一つの施設の受け止め方が全然違う。たんぼぼの家のように、施設の職員のクリエイティビティがすごく出てくる場合と、そうでない場合。完成されたものを届けるだけで良いと考えているアーティストの方がまだまだ多いと思います。



梅原徹さん

梅原 蓮沼さんと水尻さんとの作品ではあるけれど、登場人物全員が大事です。一人一人がどういう音を出すかもですが、こういうことを考えられる場自体が生まれていることが大事だなと。ヨーゼフ・ボイスの「全ての人アーティスト」という社会彫刻的な全体像が2年目をやって何となく見えてきたというか。

金森 起きている事象の表面を見た時と、社会彫刻的な構造の読み込みをした時のこのプロジェクトの見え方って、すごく違う様相が感じられてくるなど、話を聞きながら思いました。

梅原 良い感じの写真があるから、良い感じにみえるってことにしたくないんです。当事者意識を芽生えさせられるかどうか。関わることでエモーショナルな感情が生まれるのを目指したいというか。

金森 長津さんにアウトリーチでもあると整理していただきましたが、初年度がセノグラフィック的なアプローチだとすると、今年度は何と呼べるのでしょうか？

長津 何でしょうね。余白がある訳ですよ。余白があるからい

いろいろな人が関わりやすくなるような幅が生まれるという、アートプロジェクト型の作品を投げ込んでみている。劇場って、作品だけではなく観客と一緒に作られるということが言われますが、相互性や舞台と客席との間の話でしょうか。

「鑑賞」ではなく、何かを「発見」する作品

金森 今回目指していたことの一つに、施設の方々がTHEATRE for ALLの映像を再生し、紙を買ってきたりすれば、自分たちのアイデアでアクティビティが作り出せるようなある種のレシピ的なものが最終的に生まれたら良いなということがありました。普段からいろいろなワークショップなどをやられている佐藤さんは、今回のこのプロジェクトはどのように活用・発展できると思われますか。



佐藤拓道さん

佐藤 きっかけとして映像があるけれど、実はそこから離れて、「何かを発見」する現場を作っている。「あっ見つけたよ、コレ。見て見て。」というようなことを言える場はとても大事だと思います。「何かを発見する」環境は結構主体的になれるというか。また、「それだとやりづらい」「ここ繰り返したいんだ」ということに対して、「じゃあそれでやってみよう」とその場でどんどん変わっていくことがお互いにとってすごく発展的なものでもあるなと感じていました。僕個人の課題としては、障害がある人は自分から手を伸ばせないことも多いので、手を伸ばせる環境を作ることが大事でした。あと、どこかに辿りつきたいと思ったときって、そのためのくさびを打ってしまいがちなんですけど、ある程度不完全にしておいて、メンバーが行きたい方向を見て、そっちの方向に行ってみるとか、上手くいくかどうかは関係なく出来たら良いなと思いました。

金森 何が起きたかということより、どういう一言だったり、どう

いう物を差し出したかによって、演目と鑑賞者とのコミュニケーションの回路が劇的に変わっていくみたいなどの仕組みが見えると、「劇場をつくるラボ」的になっていくのかなと思ったりしました。

「やってみたい」の足場を準備する

佐藤 たんぽぽの家では、とにかく、物をたくさん準備しました。色々な物があって、触りたくなることが、まず大事かなと。使う・使わないは別として、「やってみたい」を準備する。それで触ってみて、良いねと言われたら、連鎖的に「こんな音出してみました」みたいな感じになっていくのかもしれない。



長津結一郎さん

長津 ワークショップデザインを研究する人のよく言う概念に「足場かけ」というのがあるんです。工事が終わったら外すあれです。達成したいあるものに向けて、どういう風に足場を作っていくかということと言う概念なんですけど、「誘導と足場かけは違う」と言っている人がいて、本当にそうだなと思うんです。こういう風に進んでくださいという階段を丁寧に作ることと、足場はあるけど、どう足をかけて、そこからどうジャンプしたいかは、ご自由にというのでは全然違う。足場は、いつかは外れるものですよ。いかに足場を上手くかけたり、外したりするかみたいなことが、こういうワークショップを作る時に示唆が多いなと思いました。

梅原 めちゃくちゃおもしろい話ですね。

長津 同じ条件でものを見ても、「こうかもあかも」と自分でいろいろ考えていく人と、それを完全に誘導と捉えて「こうするのが正しいんですね」と捉える人が、やっぱりいると思うんです。

『PAPER?/かみ?』も、こういう遊び方をやってみましょう、みたいになると、誘導的になってしまって、今回おもしろかったようなことが、全く起こらなくなってしまう。微妙なバランスなんだろうなと思います。

梅原 僕も「劇場をつくるラボ」には、「誘導」はいらないと思っています。佐藤さんの「試せる」機会をいかにつくるかということに共感します。

金森 レシピを見るときに、私は一つだけを見たくなくて、いろいろ比べて、配合はこの人の方がよさそうだけど、こっちの人の方がコツが詰まっているというのがある気がするの、そういう感覚としてこの記録集を使ってもらうのがいいのかもしれない。

「劇場をつくるラボ」が発展していくには

金森 初年度のまとめの会のときに、そもそも重度の知的障害がある方々が鑑賞しやすい作品がないという課題がある、と指摘したのが梅原くんだったと記憶しています。その言葉がきっかけになって今年の企画がつくられているところもあつたりするのですが、昨年からの流れを踏まえて思っていることや、今後チャレンジしてみたいことはありますか？

梅原 THEATRE for ALLが持続している状態がとても大事で、たんぽぼの家や愛成会など、昨年に続きやっていただけるところがあるというのがとても重要だと考えます。継続してトライする環境があつて、経験値として積み上がっていく機会は、福祉施設に限らず、なかなかないですし、欲しいですね。具体的なフィードバックが返ってくる状況をつくりたいというのはあります。「楽しかった」などという反応は返ってくるのですが、議論ができていない。

金森 ワークショップがどのように受け取られ、どのような課題が残されたのかを議論するにあたっては、佐藤さんのような施設にいる職員の方と意見交換ができることが重要なのかなと感じました。

長津 たんぽぼの家の佐藤さんはどう思うのかなと思って聞いていました。メンバーさんのフィードバックはあるはずですよね？必ずしも言語的なものだけではないかもしれないけれど。

佐藤 感想を聞くと「楽しかった」と簡単な答えが返ってくるので、「何がうれしかった?」「やりづらかったことない?」と突っ込んで聞くようにしています。すると出てくるんですね、「自分の力で紙をプスッと刺せたのがうれしかった」というように。あと、端的に言おうとして、うまくと伝えられない人が多いのでゆったり自由に話せる、ボワンとした時間が結構大事ですね。

梅原 たんぽぼの家では、午前と午後に分けてやっていましたよね。僕や蓮沼さんたちは1時間でやっていたので、時間を長くして、ボワンとした時間をつくるのは一つできることですね。

佐藤 知的障害のある人の中には、イメージを掴むまでに時間がかかつたりする人もいます。他の人たちの会話を聞いてだんだん言葉が出てくるということがあるので、彼らの時間軸で待つよう意識をしています。それと同時に「無」って状態もあるので、沈黙も大事にしようと思ってやっています。ただ、目的に至るまでに時間がかかると、飽きてしまうこともあつて、バランスが難しいですけどね。それを踏まえて、最初にこの映像を見て「やりたい」という衝動をどうやってつくるか、そう思わせるには何が必要かを考えることが大事だと思います。いろんな場面で衝動をつくる環境は工夫次第でできると思っています。

梅原 時間に関しては、1年目にトライしていたところがあって、1～2週間映像が流れている状況を観察するというをやっていました。今回は10分～1時間程度の時間だったので、もっとやり方があると思いました。

佐藤 もっとやれていたはずなのに、通りすぎていることがあるんだろうなと思いますよね。仕掛け方がもう少しあったのかもしれない。

金森 今年度は『PAPER?/かみ?』のみだったので、いろんな映像を見るということに関してもできなかったところですが、今回のアプローチは他の非言語的なアニメーション鑑賞にも役立てられるかもしれません。

佐藤 パフォーマンスや映像作品をどう制作しているのか、ドキュメントは見たんじゃないかなと思います。一方で、よくわからないものも大事だと思います。僕自身、タルコフスキーの映画が、寝ちゃうけど好きなんですよ(笑)

梅原 「劇場をつくるラボ」をやっていると小さい問いがたくさんできるのだけど、ストレートにメンバーさんに投げたことってないんです。1年目は、この人のための映像をここに投影する、という感じでやっていたので、つくる前段階からコミュニケーションをとって、「心地よってどんな空間?」「この映像をどこに投影したらいいと思う?」というように、素直に一緒に「劇場をつくる」ことをやってみたいですね。

金森 昨年のもとの会のときに、長津さんに「美談で終わらせるな」というご指摘を受けた記憶が蘇ってきたのですが……

長津 うまく言えない「何か」ってやっぱりあると思うんですよね。福祉施設ってそういうことの連続でケアというものが行われていると思うので、本人に聞くと「楽しかった」になることを、まわりにいる人たちも含めた丁寧な振り返りをしていく。もっと言えば、一人の利用者にじっくり関わるということもやっても面白いのかもしれないですね。どう受容して獲得していくかのプロセスを丁寧に見ていく。名前に「ラボ」と付いていますし、踏み出していくマインドと同時に、やり続けていくことで、クリエイティブなきっかけが生まれるのではないのでしょうか。

実施日=2023年4月21日(Zoomにて)

構成=米津いつか



THEATRE for ALLとは

THEATRE for ALLとは



THEATRE for ALL (シアター・フォー・オール)は、文字通り「みんなの劇場」を目指す、2021年2月にスタートしたバリアフリーなオンライン劇場です。車椅子を利用している人、寝たきりの人、子育てや介護で出かけにくい人、視覚聴覚に障害のある人、日本語が母語でない人、劇場から遠くに住んでいる人、など様々な理由で映画や舞台芸術の鑑賞が難しい状況に対して、アクセシビリティ = 回路を切り開きたい、という思いでサービスを運営しています。

これまでに演劇・ダンス・映画・メディア芸術などの作品を中心に、日本語字幕、音声ガイド、手話通訳、多言語対応などのアクセシビリティに対応した作品をインターネット配信しながら、オンラインリアルでのワークショップ、様々な当事者の方々が集うインクルーシブな上映会イベント、アート×アクセシビリティのコーディネート事業などを行っています。

URL ——— <https://theatreforall.net/>



劇場をつくるラボについて

THEATRE for ALLではオンラインの劇場として映像作品を日々配信していますが、実際様々な障害当事者の視聴者にどのように鑑賞されているのか、また、そもそも視聴にあたってどのような障害が発生しているのかを知る必要があると考え、2021年に「劇場をつくるラボ」を始動しました。

これまで、初年度に全国4ヶ所、2年目に4ヶ所+特別編2ヶ所での上映会を実施してきました。これからも、日本全国の福祉施設や当事者コミュニティの方々と共に、実験を行いながら、各地に上映会をお届けしてまいります。ご興味ある方はいつでもご連絡ください。

URL ——— <https://theatreforall.net/geki-tsuku-lab/>

劇場をつくるラボ 実施場所



福祉施設での上映会とワークショップ 「PAPER?/かみ?」

プロジェクトメンバー

音楽
蓮沼執太

映像
水尻自子

音響・コミュニケーションプログラム
梅原徹

コーディネーター
米津いつか

協力
社会福祉法人印旛福祉会 いんば学舎・陣屋

企画・制作
THEATRE for ALL 事務局 (株式会社precog)

プロデューサー
金森香

プロジェクトマネジメント
和久井碧、林芽生

上映会パートナー

社会福祉法人印旛福祉会 いんば学舎・陣屋
| 山田暁弘 (施設長)、一ノ宮敏江

社会福祉法人わたぼうしの会 たんぼぼの家 アートセンター HANA
| 佐藤拓道 (副施設長)

社会福祉法人 愛成会 指定障害者支援施設メイブルガーデン
| 青木信、川久保州子 (支援スタッフ)

助成

公益財団法人森村豊明会

協力

社会福祉法人印旛福祉会 いんば学舎・陣屋

主催

一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL

THEATRE for ALL

事務局
(株式会社precog)
(2022年4月 - 2023年5月)

プロデューサー
中村茜

コミュニケーションディレクター
大久保玲子

プログラムディレクター
金森香

配信プログラム構成・バリアフリー制作
田澤瑞季、林芽生

法務・会計
西多恵子

編集・コミュニケーション
今井浩一・清水恩

営業・運営サポート
佐波雄大・和久井碧・箕浦萌

アドミニストレーション
森田結香、斉藤友理、平岡久美

福祉施設での上映会と ワークショップ 「PAPER?/かみ?」 記録集

編集
米津いつか

デザイン
網島卓也 (山をおりる)

発行日
2023年5月

発行
一般社団法人 DRIFTERS INTERNATIONAL



撮影-米津いつか(上・下)

劇
場
を
つ
く
る
ラ
ボ
2
0
2
2

